国道４１５号道路改築（萩浦橋）事業に伴う発掘調査報告

富山市千原崎遺跡発掘調査概要

1999

富山市教育委員会

国道４１５号道路改築（萩浦橋）事業に伴う発掘調査報告

富山市千原崎遺跡発掘調査概要

1999

富山市教育委員会

例　　言

1　本書は、富山市千原崎地内に所在する千原崎遺跡の発掘調査概要である。
2　調査は、富山県土木部が事業主体となる国道４１５号道路改築（萩浦橋）事業に伴うもので、富山県土木部の委託を受けて、富山市教育委員会が実施した。
3　調査期間　　現地調査　　平成10年７月15日～平成10年８月７日
　　遺物整理　　平成10年８月８日～平成11年３月25日
4　調査担当者　　富山市教育委員会　主任学芸員　古川知明
5　調査にあたり、文化庁、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。また出土品整理にあたり、宮田進一氏にご指導いただいた。記して謝意を表します。
6　遺構記号は、溝跡：SD、土坑：SKである。
7　出土品の図化作業は、古川が行った。
8　出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
9　本書の執筆は、古川が行った。

目　　次

例言　1
Ⅰ　遺跡の位置と環境　2
Ⅱ　調査の経緯　4
Ⅲ　調査の概要　6
Ⅳ　まとめ　9
図版　11
報告書抄録　20

Ⅰ　遺跡の位置と環境

千原崎遺跡は、富山市街地の北方約５㎞の海岸部、神通川右岸河口付近の富山市千原崎地内に所在する近世初期を主とする集落遺跡である。遺跡は神通川河口から約2㎞遡った地点にあり、神通川とこれに沿って東側約200ｍを平行に走る富岩運河とによって挟まれた区域に所在する。

遺跡は標高２～３ｍの神通川自然堤防上に立地する。遺跡の西辺には江戸時代初期と推定される護岸施設が試掘調査で発見されており、近世初期にはほぼ現在の流路が形成されていたものと推定される。集落の形成された地盤は締まりのない中粒砂で、下層ほど粒度が大きくなる。

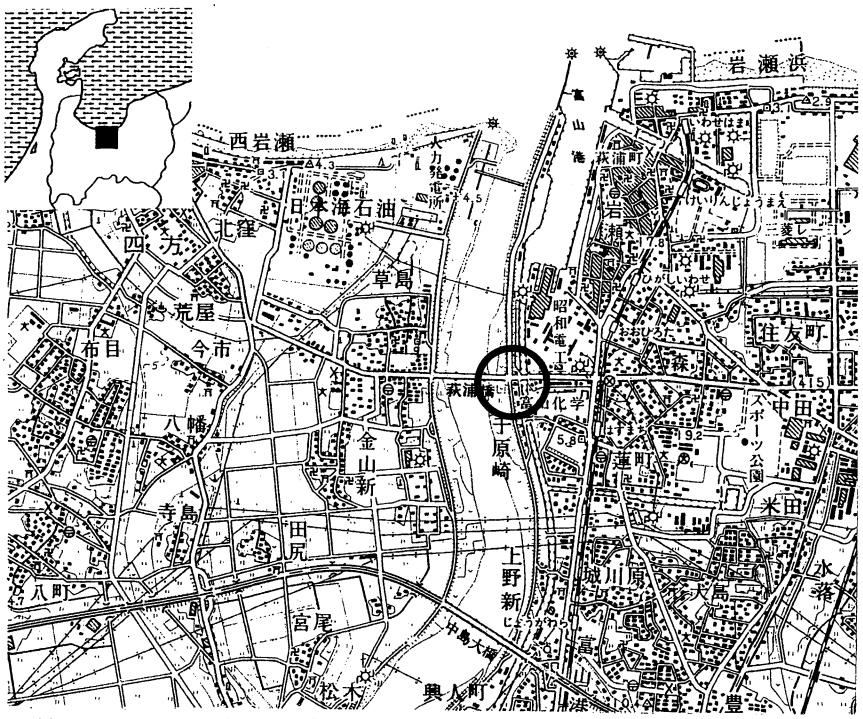
神通川は、呉羽山丘陵以北において、かつてかなりの蛇行や河道の変更があり、河岸段丘崖線の名残や低湿地の存在からその痕跡を知ることができる。千原崎や対岸中州の草島の村はいずれも自然堤防上に立地し、洪水等の被害を受けにくい安定した土地であったことも遺跡の形成の一因となっていると考えられる。

『越中記』によれば、神通川の河口はもと西岩瀬側（現在の富山市四方）にあったが、江戸時代万治元年（1658）の大洪水で東岩瀬に流れができ、その後寛文8～9（1668～69）年の洪水以後本流は東岩瀬側となった。これがほぼ現在の流路である。寛文４年越中国四郡絵図には二股の神通川が描かれている。万治元年以前は、西岩瀬に河口をもつ西側流路が主流であったと推定され、その流路は古川と呼ばれる小河川として名残をとどめる。その時点においても東側流路には河道が残っており、遺跡の形成が始まった頃には、舟運の可能な程度の河川がすでに存在していたと考えられる。遺跡はその河川の東岸に構築されたものである。

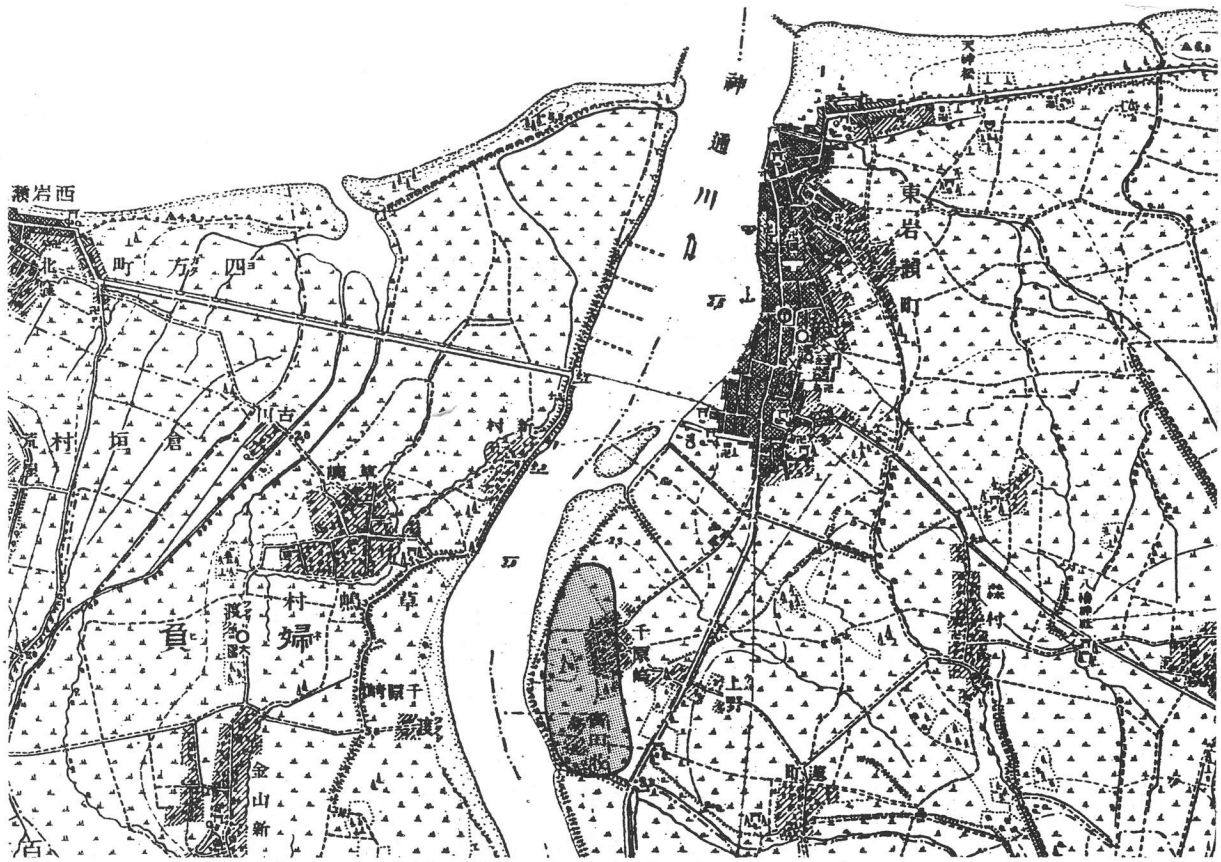
千原崎遺跡の立地について、地形図等による古地形の復原という手法で明らかにしたのが第3図である。

遺跡の周囲には縄文時代から近世初期の遺跡が広範囲に所在する。縄文時代には神通川左岸海岸部の四方荒屋遺跡で縄文後期～晩期の土器、千原崎遺跡で中期から晩期の土器が出土しているが少量であり、遺構を伴わなかったり二次堆積であったりしており、集落の形成は積極的には認められない。

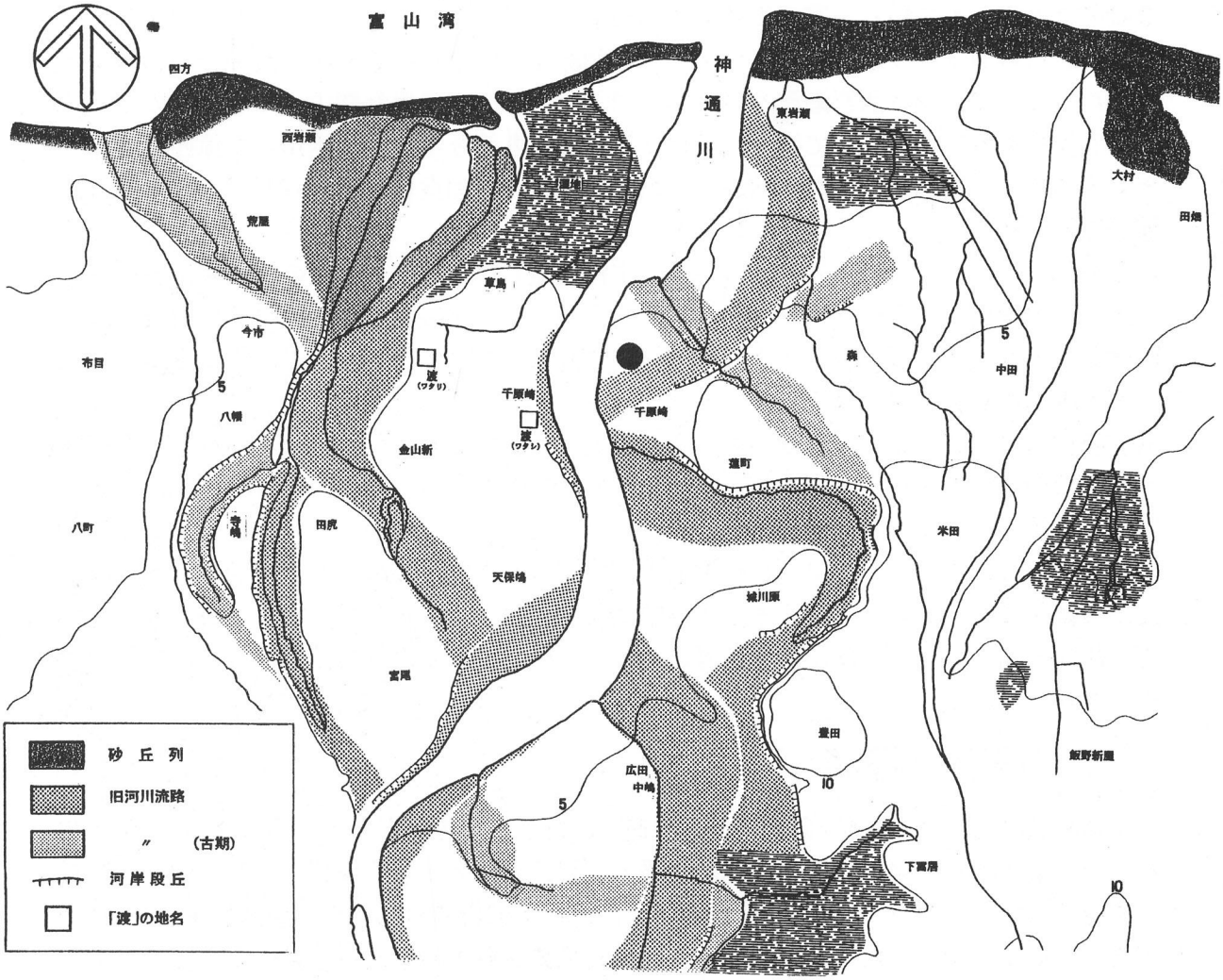
弥生時代中期から古墳時代前期にかけては、



第１図　千原崎遺跡位置図（１：50,000）



第２図　1910（明治43）年陸地測量部測量迅速図（１：25,000）　網点が遺跡範囲



第３図　千原崎遺跡（●印）周辺の古地形と地名（明治43年陸地測量部測図迅速図を利用）

左岸海岸部で大規模な集落が形成される。江代割遺跡、四方荒屋遺跡で竪穴住居が検出されている。いずれも弥生時代後期に洪水による冠水があり集落は埋没しているが、古墳時代前期に再び集落が形成され、それ以後は比較的安定した集落形成がなされたようである。

奈良・平安時代には、対岸の岩瀬・米田・豊田の河岸段丘上に官的施設と推定される遺跡群が出現する。米田大覚遺跡では掘立柱建物群・竪穴住居群が検出され、井戸祭祀や則天文字を記した墨書土器の出土がある〔富山市考古資料館1997〕。豊田大塚遺跡では、平安時代の溝に、「神服小年賀」と書かれた人形（ひとがた）や人面墨書土器の出土があり、祓など律令祭祀の場と考えられている〔富山市教委 1998ａ〕。

古代において、神通川は新川郡の西境であったと考えられている。『和名類聚抄』には新川郡石勢郷とあり、神通川河口の岩瀬地区に比定されている。また『延喜式』には北陸道の驛家として磐瀬駅が置かれていたとみえる。駅の位置については、東岩瀬か西岩瀬か議論の分かれるところであるが、河川の変遷等から考えて当時の流路右岸河口であった西岩瀬側であった可能性が高いと考えられる。『越中志徴』では駅の位置を西磐瀬としている。

中世においては、千原崎遺跡では，珠洲焼等中世遺物の出土がある。神通川左岸の四方荒屋遺跡では掘立柱建物跡が検出され、また四方北窪遺跡においては掘立柱建物、溝群などの集落跡が検出されている。特に四方北窪遺跡は、西岩瀬集落域の東端にあり、刻書のある中国製天目模倣瓦質椀という稀少な遺物の出土等から、中世西岩瀬港町の一角にあたるものと推定されている〔富山市教委 1998ｂ〕。

日本最古の海商法『廻船式目』貞応２年(1223)でかかげられる三津七湊の一つに越中岩瀬湊がある。この湊は西岩瀬港をさすもので、その繁栄は享保年間頃まで加賀藩の米積出港として利用されるなどして続き、江戸十三港のうち第８番に「越中州八重津西岩瀬港」とあげられるまでになったが、前述の大洪水以後は東岩瀬港に機能が移転し、その後は漁港等として利用されるにとどまっている。

江戸期の千原崎には、北陸街道（加賀藩主往還道）が通過するための渡し場が設けられた。中世以降、下流には藩営の「岩瀬の渡し」があり、慶長14年(1609)の廃止以後草島に移動した。寛文８年(1668)の洪水以降、草島の渡りは衰微し、千原崎と金山新を結ぶ「千原崎の渡し」が新たに設けられている。

この渡しについては、明治期の地図では河道西岸側に「渡」（ワタシ）という字名を記載しており、遺跡の所在する東岸側ではない。地形図等ではこの渡と金山新の間に河道があったことは読み取れず、今後の詳細な検討が必要である。

これらのことからわかるように、神通川河口周辺は古代より陸上海上交通の要衝の地として位置付けられていたといえる。千原崎遺跡はこのようなエリアの中に位置し、平成６年の調査で発見された集落の性格を考えるとすれば、河川に面する港町宿場的な性格が想定できよう。

Ⅱ　調査の経緯

千原崎遺跡は、大正10年（1921）3月神通川改修工事の際、人骨とともに弥生式土器が出土し、富山縣史蹟名勝天然記念物調査委員大村正之によって調査報告され、知られるようになった（大村1921)。その後昭和初年に行われた富岩運河掘削の際にも大量の土器や樹木等が出土した。それらは東京国立博物館に保管されており、弥生時代末から古墳時代

初期の完形の台付壷は代表的なものである。

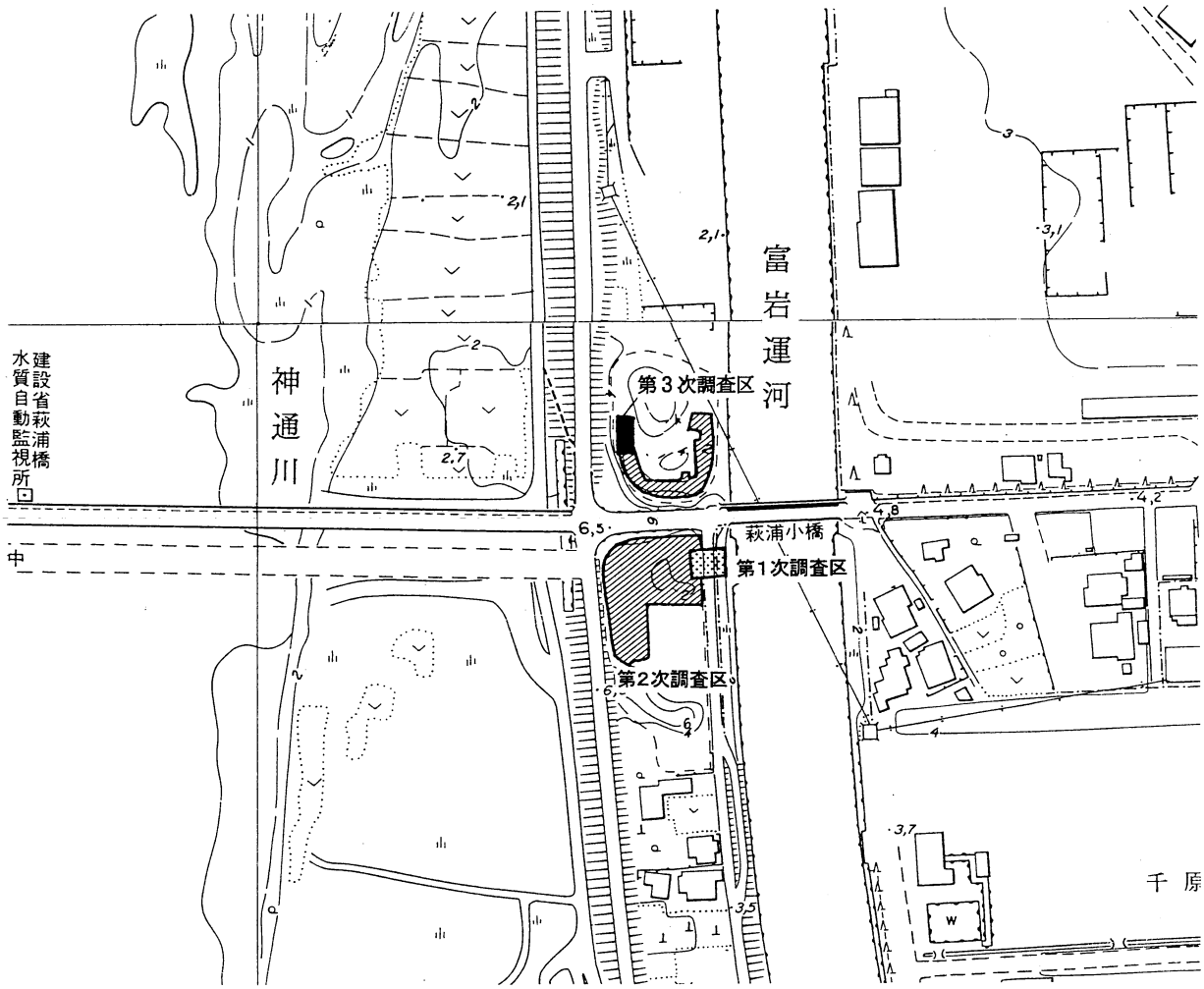
富山市が昭和50年に発行した『富山市埋蔵文化財包蔵地地図』ではおよその出土地点を押さえるにとどまったが、昭和63～平成3年に行った分布調査では、神通川河川敷を中心とした部分で、古代から近世の遺物散布範囲が広がっていることが確認されたため、遺跡範囲を大幅に広げ、総計161,000㎡とした〔富山市教委　1993〕。

平成２年、萩浦橋新設計画について富山県富山土木事務所から協議があり、これに伴う東詰河川敷地内の試掘調査では、河川敷のほぼ中央に古墳時代前期とみられる遺物包含層及び遺構（穴）と江戸時代初期とみられる護岸石列を確認した。

平成５年、萩浦橋東詰のロータリー化計画が提示され、これに伴う試掘調査で5,250㎡の遺跡が確認され，保護措置が必要となった。協議の結果、緑地帯予定地2,000㎡を除いた3,250㎡の発掘調査が必要とされたが、調査を担当する市教育委員会においては十分な調査体制がとれないため、緊急度の高いところは民間委託を活用し、工期との調整を図りながら調査を進めることとなった。

平成６年度は、ボックス工事に伴う調査（民間委託）及び南北両ロータリーの道路敷の調査、合わせて2,124㎡の発掘調査を行った。

調査で確認された遺構は、土間建物２棟、掘立柱建物（棟数２棟以上）、竪穴状建物３棟、井戸８基、土坑188基、溝14本があり、江戸時代初期、16世紀末から17世紀前半を中心とした集落の形成が確認された。この集落は、18世紀初め頃まで存続したとみられる。



第４図　発掘調査区（１：3,000）

それから４年をへた平成10年に、北側ロータリーの一部拡張のため50㎡の発掘調査が必要となった。

発掘調査は、平成10年７月15日から同年８月７日まで行った。

Ⅲ　調査の概要

１　概要（第５図）

調査では、土坑１基、溝跡１条を検出した。平成６年度には今回調査区の南端部までの発掘を行っており、東西に走る溝（ＳＤ08）の北側肩部までを検出して終わっている。土坑ＳＫ０１は、このＳＤ０８より新しく構築された遺構と推定される。

基本土層は、上部の盛土の下に細砂礫を含む褐色砂質土の堆積があり、黄灰色中粒砂の地山にいたる。地山は深くなるにつれ粒度が粗くなっていき、湧水が激しくなる。

２　遺構（第５，６図）

土坑　ＳＫ０１

調査区の西端で全体の２分の１ほどを検出した。平成６年度調査で検出した溝ＳＤ０８の肩部を切って構築されているとみられる。

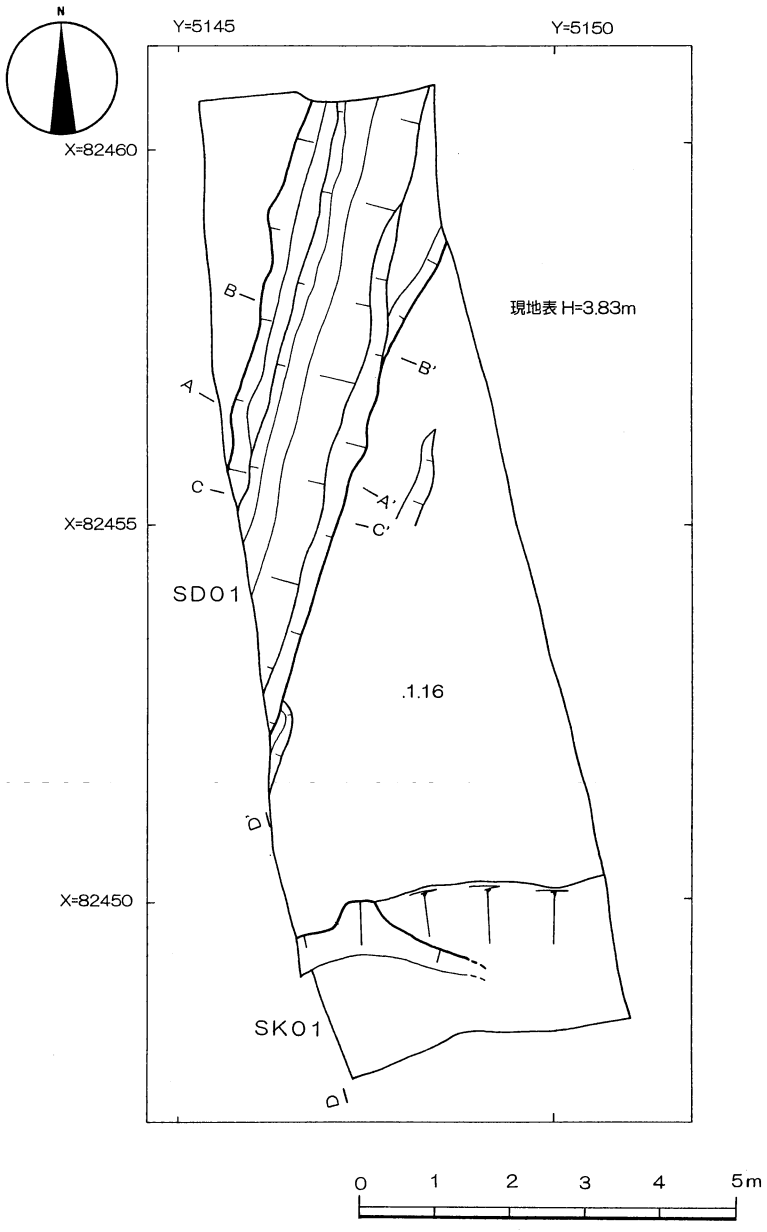
土坑は直径約1.0ｍの円形になると推定されるが、東側は攪乱のため壁面を検出していない。

深さは北側で70㎝、南側で110㎝を測る。

北側壁の断面形状から、土坑は垂直にあるいは底面をやや広く掘ったものとみられる。

埋土はほぼ水平堆積をなし、上部は砂・礫が混じる褐色土を主体とし、下部は灰色砂が主体となる。

遺物は、埋土の下部（第16層）から越



第５図　遺構全体図（１：100）

中瀬戸の壷・小皿、土師器皿片が出土している。

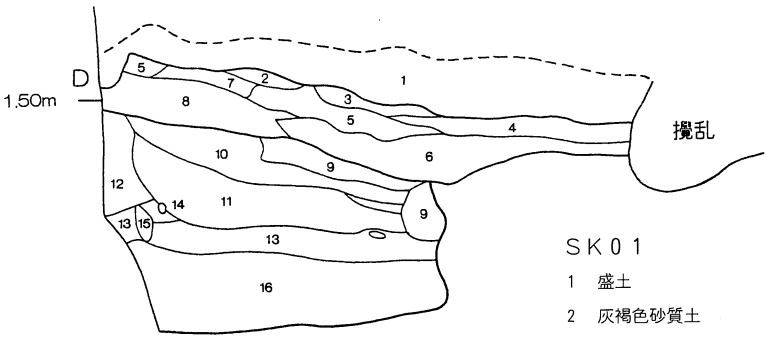
土坑の上には灰色～灰褐色の砂質土が堆積しており、溝等の遺構が重複していると考えられた。

溝　ＳＤ０１

遺構は表土直下で検出した。溝の流路方向はＮ－15°－Ｅで、延長９ｍを確認した。溝の幅は1.7～2.3ｍで、北側ほど広くなる。断面形は浅い皿状をなし、西側の壁の立ち上がりがやや急である。溝の底においては、中央西壁寄りに幅25～30㎝の一段深くなった細い溝が走っている。

溝は、拳大から人頭大の礫によって埋まっており、マトリックスは上部では灰色粗砂や灰褐色シルト質土、下部では黄色中粒砂や砂灰色粘土である。礫中からは近代の平瓦破片、

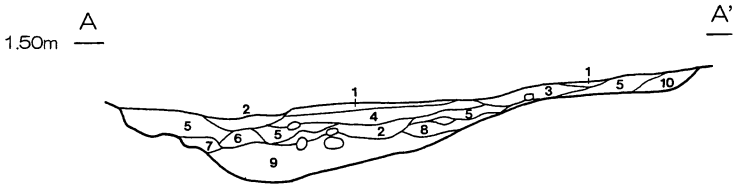
土坑ＳＫ０１

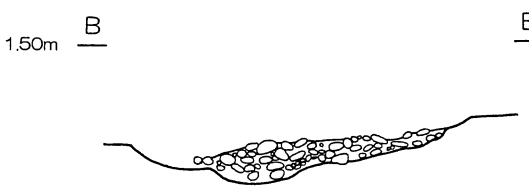


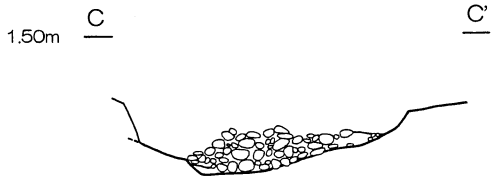
ＳＫ０１

1　盛土
2　灰褐色砂質土
3　灰褐色砂質土（円礫φ5-40mmを含む）
4　黄灰色砂（暗褐色土含む）
5　灰色細粒砂（暗褐色土含む）
6　灰色細粒砂
7　暗灰色砂
8　灰色中粒砂（暗褐色シルト質土多く含む）
9　明るい褐色土（細礫少し含む）
10　褐色土（細礫・粗砂少し含む）
11　褐色土（粗砂わずかに含む）
12　褐色土（木炭粒少し含む）
13　暗褐色土
14　暗褐色土（細礫少し含む）
15　灰色粗砂
16　灰色中粒砂（鉄分多い，土器を含む）

溝ＳＤ０１

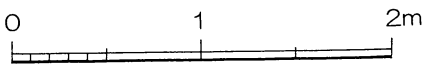




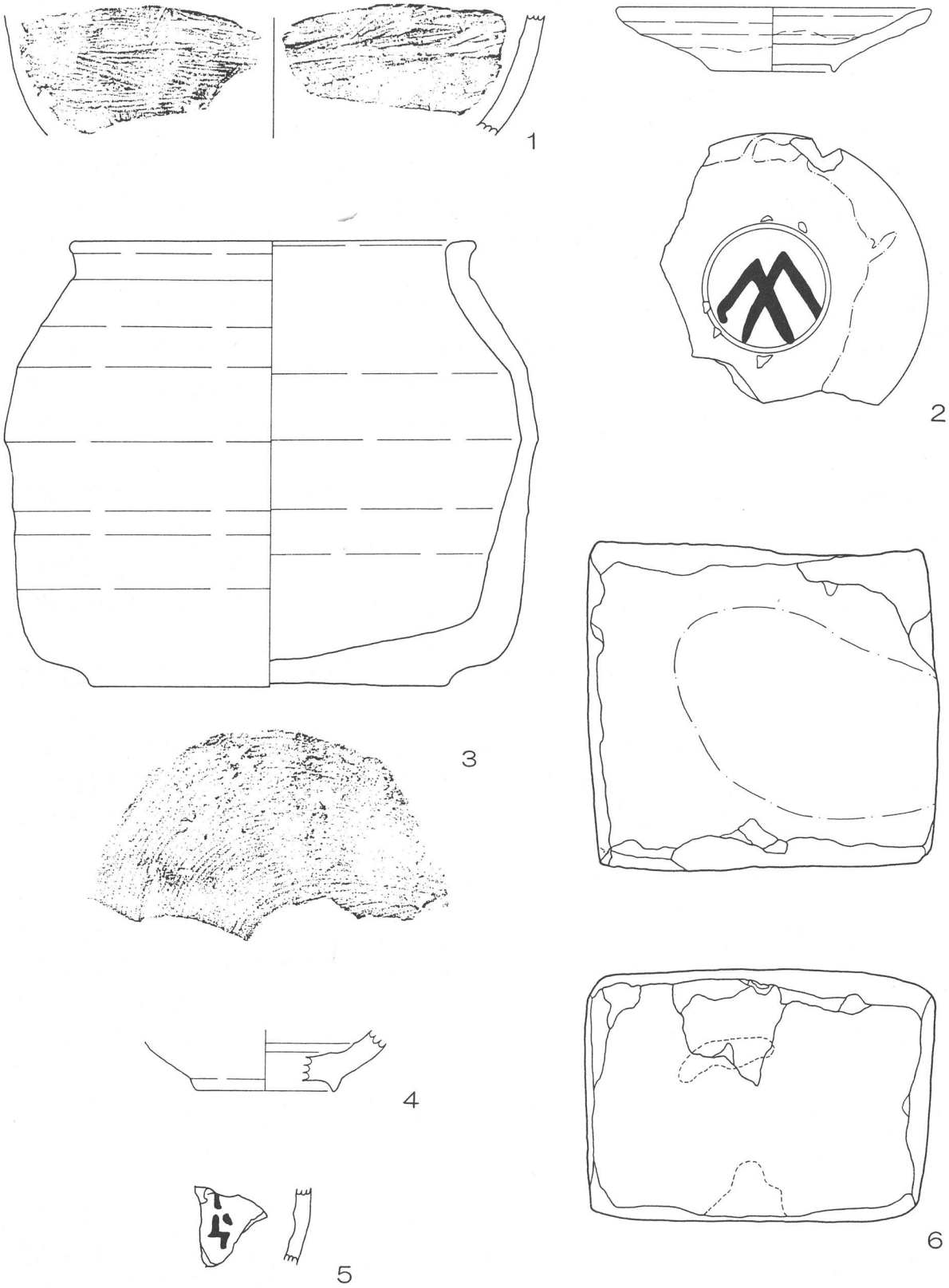


ＳＤ０１

1　暗灰色土（砂･粘土混合）
2　灰色粘土
3　褐色砂礫土（φ25mm）
4　灰褐色砂質土（灰色砂・粗砂ブロック状に含む、鉄分多い）
5　灰色砂（暗褐色砂質土混じり）
6　暗褐色土・灰色粗砂混じり
7　褐色粘質土
8　暗褐色砂質土
9　礫層（φ5～400)、灰色粗砂・灰褐色シルト質土入る



第６図　遺構土層図（１：40）



第7図　出土遺物

1　土師器　2～4　越中瀬戸　5　骨蔵器
6　五輪塔地輪

鉄製針金、陶磁器が出土した。針金は数本が折り重なってブロック状になったものが３地点ほどに分散して出土した。これらのことからこの溝は近代の所産と考えることができる。

３　遺物（第７図，図版９）

出土遺物には、土師器、越中瀬戸、骨蔵器、五輪塔、鉄製品、瓦がある。

土師器（１）　甕の胴部下半の破片である。外面は横方向のハケ目、下部では縦方向に施す。ハケ目の幅は１㎝程度と思われる。内面は横方向のケズリで、工具の幅は約１㎝である。外面の一部に被熱による黒化が認められる。古墳時代の所産と考えられる。ＳＤ０１の礫層中から出土した。

越中瀬戸（２～４）

２は灰釉の丸皿である。内禿で、口縁は外反ぎみとなる。高台は三角形状に削り込んで作っている。外底面には『⅄』の墨書がある。内底面には、重ね焼きをした皿の高台端の跡が残る。越中瀬戸編年〔宮田1998ａ〕のⅡ期、17世紀前半のものと考えられる。排土中の出土である。

３は鉄釉の建水とみられる。器高14.9㎝、胴部の最大径17.8㎝を測る。越中瀬戸窯跡群山下窯に類品があり、17世紀前半頃のものと考えられる。ＳＫ０１下部出土。

４は灰釉の皿底部である。内底面は凸帯状になり、すり減って磨耗している。高台は、三角形状の付高台である。越中瀬戸編年のⅠ期、16世紀末から17世紀初め頃のものと考えられる。ＳＫ０１出土。

骨蔵器（５）　素焼の骨蔵器胴部の小破片である。外面に墨書がみられるが、判読できない。近世以降のものと考えられる。ＳＤ０１上部出土。

五輪塔（６）角閃石安山岩製の地輪1点がある。上面は自然面を残し甲盛に仕上げている。正面（下図）及び両側面は、敲打により平らに整形されている。正面裏及び下面は割れ面を大きく残している。上面中央を中心に、苔類のためか黒化が見られる。これは水輪の置かれていた痕跡を示すものと考えられる。排土中の出土である。

鉄製品（図版９のＤ）　針金片７点がある。太さは４～８㎜と推定されるが、錆により径１～２㎝に膨張している。長さ10～20㎝のまっすぐなもの数本が折り重なった状態でＳＤ01から出土した。長さ５㎝程度の短いものには、先端が曲がったもの、Ｕ字状になったものが含まれる。

瓦（図版９のＥ）　釉薬のかかった平瓦である。胎土は褐色を呈し、粘土の重ね跡と砂粒がみられる。釉薬は濃い茶色で、ちりめん状の細かな凹凸とひび割れがある。二次的に被熱しているとみられる。大正末期以前の製品と考えられる。ＳＤ０１出土。

Ⅳ　まとめ

千原崎遺跡は、平成６年の調査において、近世初期の集落遺構が確認されている。今回の調査区はその北側の隣接区域であり、集落の一角にあたる。この集落に関する近世初期の遺構は土坑１基にすぎないが、６年度調査では多くの井戸・土坑・溝・土間建物跡がすぐ近接して検出されている。

土坑の年代は、出土した越中瀬戸の年代から17世紀前半とみることができる。６年度調査では、集落は17世紀前半と17世紀後半～18世紀前半の２時期があり、寛文８（1668）年の神通川大洪水の後、「千原崎の渡し」が置かれたことに伴い、集落が港町宿場的な性格

に変化したものと予測した〔古川・鹿島1998〕。

「千原崎の渡し」の位置について考えてみたい。古い地名として残っているとされる「渡」の位置は現在の流路の左岸側であり、前述のようにこの地点と金山新との間には、地形から見て河川が存在したとは考えられない。すでにこの時期には神通川の主たる流路はほぼ現在と同一と推定されることから、この地名の「渡」は金山新側の渡しであり、右岸側の千原崎集落のいずれかに「千原崎の渡し」が存在したものと考えるのが妥当であろう。この意味で第2段階（17世紀後半～18世紀前半）の千原崎遺跡の集落跡は、「千原崎の渡し」に何らかの形で関わりのある集落跡とみることができる。

参考文献

市村高男　1996　「中世後期の津・湊と地域社会」『中世都市研究3　津　泊　宿』中世都市研究会

越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会　1988　「越中瀬戸－発祥四百年記念誌－」

大村正之　1921　「彌生式土器遺跡」『富山縣史蹟名勝天然記念物調査会報告2』

斎藤朝子・高尾由美子・内山久子　1996　「富山城址採集の瓦について」『富山市考古資料館紀要　第15号』富山市考古資料館

塩　照夫　1992　『富山県歴史の五街道　北陸道・能登街道・飛騨街道・五箇山街道・立山道』

高瀬重雄監修　1994　『富山県の地名』日本歴史地名大系16　平凡社

富山県　1982『富山県史　通史編Ⅲ　近世上』

富山市教育委員会　1993　『富山市遺跡地図（改訂版）』

富山市教育委員会　1996　『富山市千原崎遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　1998ａ『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』

富山市教育委員会　1998ｂ『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ　四方北窪遺跡』

富山市　1987『富山市史　通史上』

富山市考古資料館　1997　「発掘速報展'96　富山市の古代文字～富山市内遺跡出土墨書土器～」『富山市考古資料館報第32号』富山市考古資料館

富山大百科事典編集事務局編　1994　『富山大百科事典』　北日本新聞社

布目久三　1982　『四方郷土史話』

古川知明・鹿島昌也　1998　「富山市内の近世遺跡」『北陸近世遺跡研究会会報No.7』

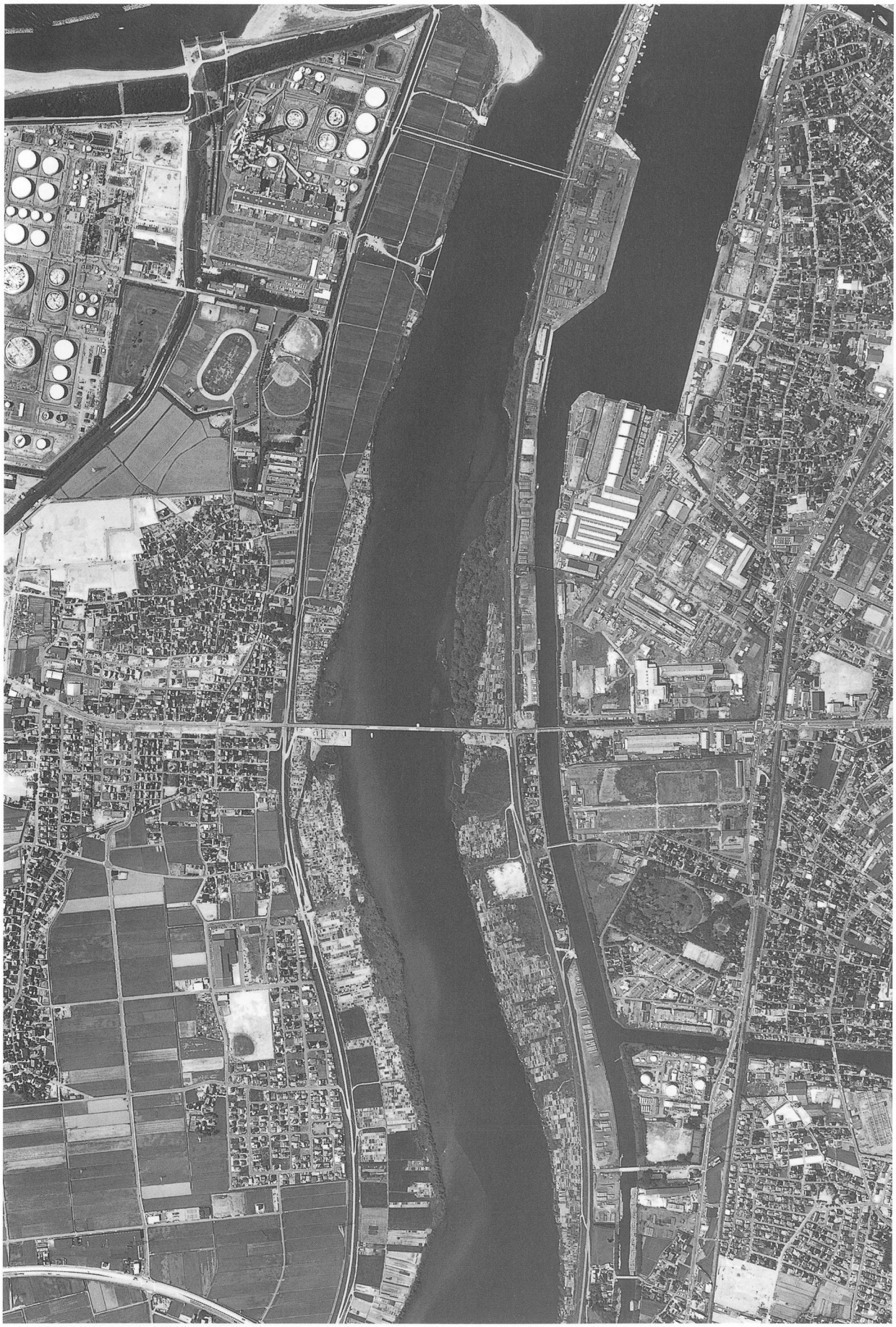
湊　晨　1945　「千原崎遺跡」『富山県史考古編』富山県

宮田進一　1988ａ「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境第12号』富山考古学会

宮田進一　1998　「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸　考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会編　桂書房

宮田進一　1998ｂ「越中瀬戸の成立と展開」『情報と物流の日本史－地域間交流の視点から－』地方史研究協議会編

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館



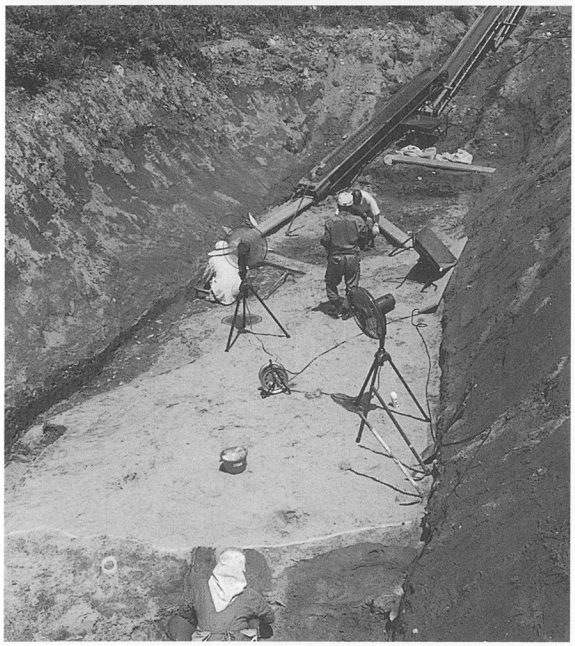
千原崎周辺の航空写真（1992年）

図版2

米軍撮影の航空写真（1952年11月）

調査前風景（南から）

遺構確認状況（南から）



遺構発掘風景

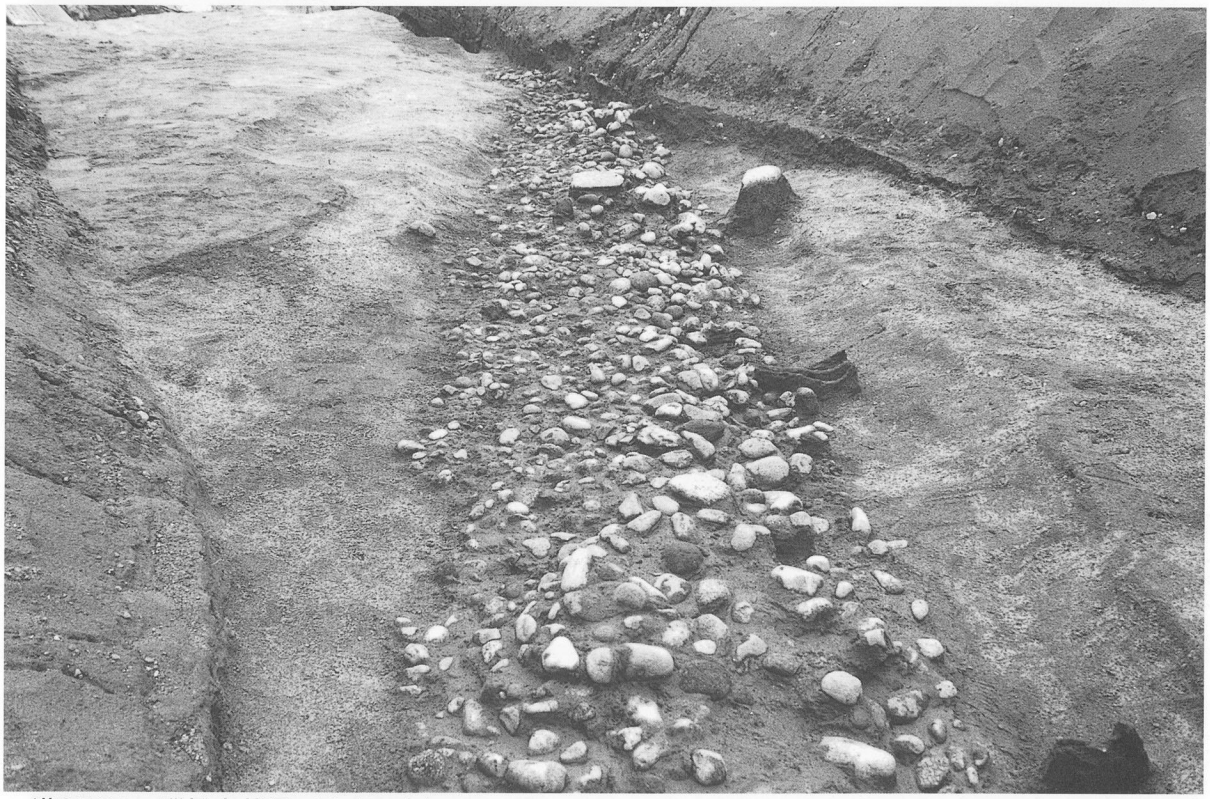
図版4

調査区全景（南から）

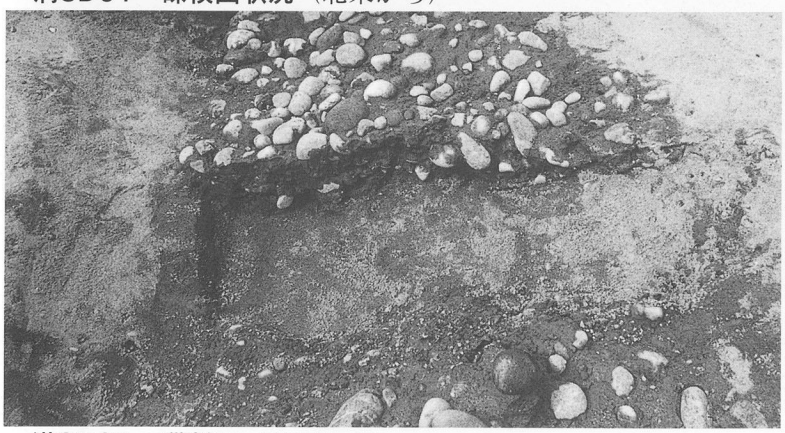
溝SD01　礫横出状況（北東から）

図版6

溝SD01　礫上部の土層（南西から）



溝SD01　礫検出状況（北東から）



溝SD01　礫断面（南西から）

溝SD01　陶器片出土状況

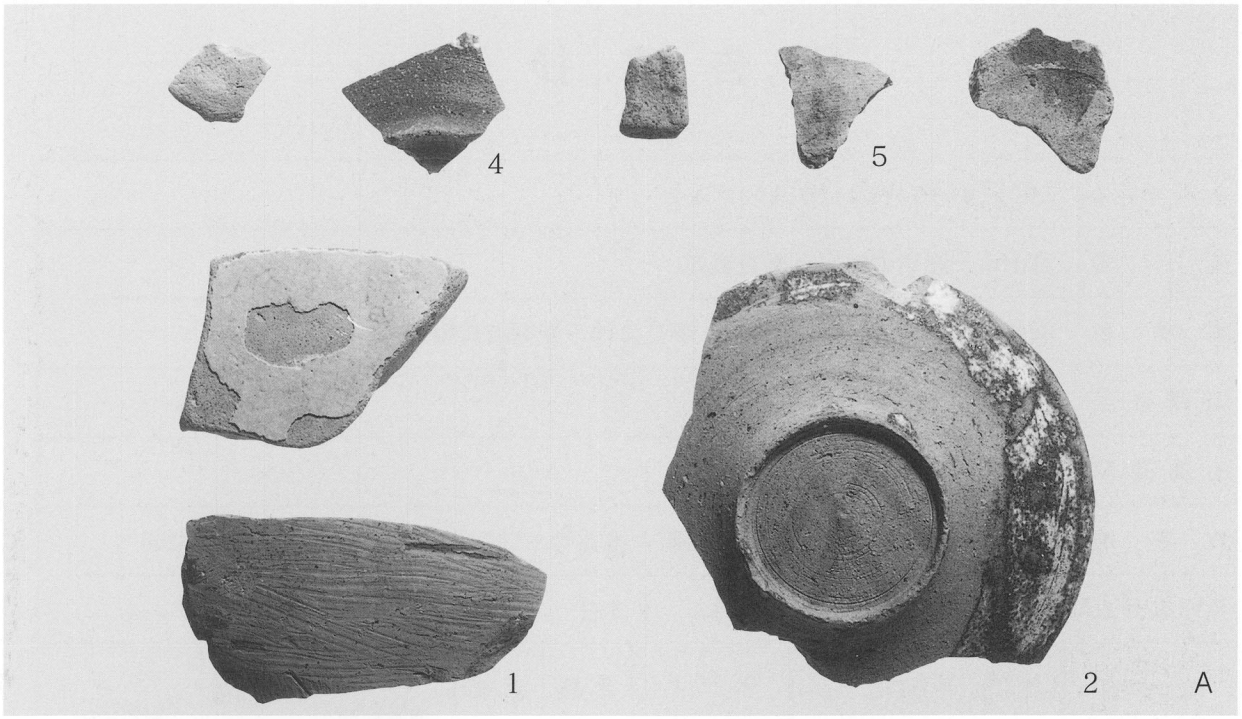
溝SD01　礫・鉄製品出土状況（南西から）

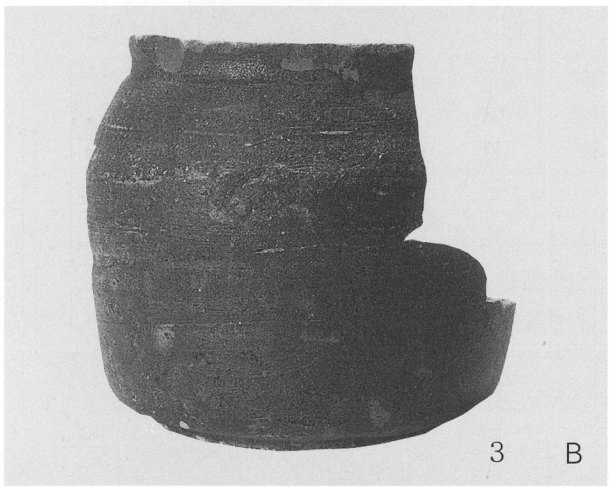
SD01　鉄製品出土状況

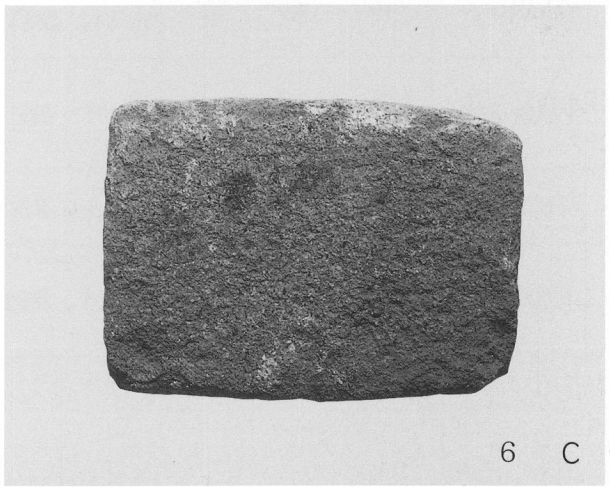
図版8

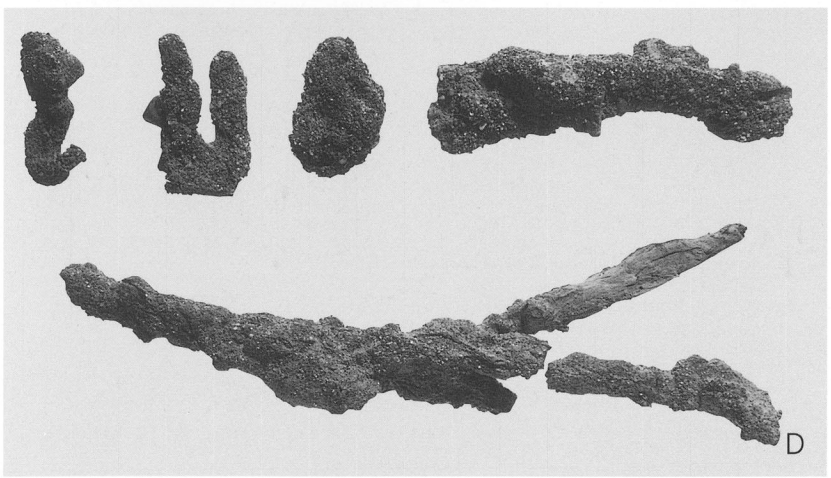
土坑SK01　完掘状況（南から）

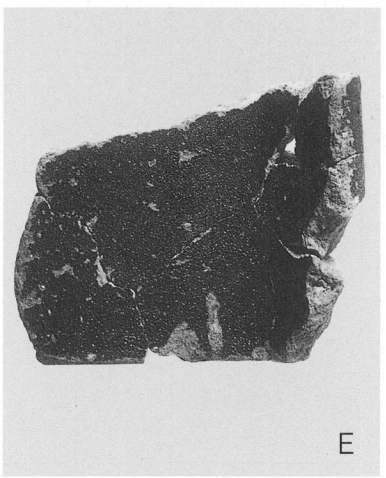
土坑SK01　断面（東から）











A　陶器類（2/3）　**B　越中瀬戸**（1/3）　**C　五輪塔地輪**（1/4）　**D　針金類**（1/2）　**E　瓦**（1/3）
（数字は第8図の番号と同じ）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とやましちはらざきいせきはっくつちょうさがいよう
書　　名	富山市千原崎遺跡発掘調査概要
副 書 名	国道415号道路改築（萩浦橋）事業に伴う発掘調査報告
編 著 者 名	古川知明
編 集 機 関	富山市教育委員会
所 在 地	〒930-8510　富山県富山市新桜町７番38号　TEL(0764)31-6111、(0764)42-4246
発行年月日	西暦　　１９９９年　　３月　　２５日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
千原崎遺跡（ちはらざきいせき）	富山市千原崎（とやましちはらざき）	16201	017	36° 44′ 30″	137° 13′ 30″	19980715 ～ 19980807	46	国道415号 道路改築 （萩浦橋） 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千原崎遺跡（ちはらざきいせき）	集落跡	近世	土坑１、溝跡１	土師器、越中瀬戸、 骨蔵器、五輪塔地輪	

国道415号道路改築（萩浦橋）事業に伴う発掘調査報告

富山市千原崎遺跡発掘調査概要

1999（平成11）年３月25日

編集・発行　富山市教育委員会

富山市新桜町７番38号

印　刷　所　とうざわ印刷工芸㈱